辺土岬への採集など，潮の良い日はほとんど毎日出かけ，私はその都度ご一緒させていただいたが，そのほかに琉球大学の香村真徳さん（当時助手，後に教授）や米国留学から帰国したばかりで那覇に滞在していた東京大学地質学教室の小西健二さん（海藻化石の研究者，後に金沢大教授）も時にお供をした。食事のあと，採集中，あるいは行き帰りのバスの中などで，「干天に慈雨」を得る如く私は貪欲にいろいろと海藻についてお尋ねした。随分不躾な質問もあったと思うが，先生は嫌なお顔はされず丁寧に教えて下さった。あるとき，採集した海藻から離れて，論文の中で系統や類縁などの論議を先生がほとんどなされないことについて伺ったことがある。事実の解明が進めば自然と明らかになることでしょうという趣旨のお言葉で，むやみに系統論を振りかざすことには先生は批判的であった。このほか，昭和初期にアメリカに初めて留学されたときの話，英会話のこと，ベルゲーゼン博士（F. Boergesen 1866-1956）のこと，北大に植物分類学教室を創設するに当たって各地へ海藻採集で出かけたことなどなど，貴重なお話を幾つも伺った。知人のご招待の山田先生に連れられて行った那覇市の名門料亭“那覇”，琉球大学生物学教室の皆様のお招きで先生とご一緒した料亭“京屋”での沖縄料理も忘れられない思い出である。山田先生とご一緒させていただいた沖縄での二潮の期間は私にとって素晴しい経験と勉強の日々であり，楽しい毎日であったが，同時に先生に対する畏敬の念を一層深くした日々でもあった。

エピローグ

私は翌年早々奇しくも山田先生が初めて留学されたバークレイのカリフォルニア大学に行くことになった。先生は親切に推薦状を書いて下さり，またパーペンフス教授 (G.F. Papenfuss 1903 - 1981) とシルヴァ博士 (P.C. Silva) を，先生が留学当時の先生方であったセッチェル教授 (W.A. Setchell 1864 - 1943) とガードナー博士 (N.L. Gardner 1864 - 1937) になぞらえて，私の渡米を激励して下さった。

山田先生が病床の岡村金太郎先生に乞われて，岡村先生の畢生の大著，日本海藻誌 (1936) の校正を行い，さらに岡村先生亡きあと海藻標本や蔵書の整理をされたことは良く知られている。山田先生は東京大学のご出身であるが，水産講習所の教授で，先輩でもあった岡村先生の指導を受けたこともまた良く知られている。岡村先生は「海藻学ヲオヤリナサイ」(1927) と題する小文の中で，「（わが国の海藻研究で）自分がやったのは大通りの道路を開いた位のもので，遠藤（吉三郎）君がその処々に少しずつ村落を作った様なもの・・・」と書いておられるが，その大通りの道路は山田先生によって拡張され，補強され，整備され，長く伸ばされ，さらに数々の部落が弟子たちや孫弟子たちによってひしめくように作られた。日本藻類学会もまた山田先生を中心に創設された。日本の藻学の今日の隆盛は山田幸男先生がおられたからこその感が強い。

（千葉県立中央博物館）

川嶋　昭二：山田幸男先生と宮部金吾博士

“The greatest algologist” これは1950年の秋の頃，私が北海道大学理学部植物学科の2年目学生のときに，かつて札幌農学校に学んだ父に促されて北大の学問的シンボルとして全学の教官，学生が敬愛已まなかった老植物学者，宮部金吾博士を農学部の名誉教授室に訪ね，問われるままに山田幸男先生の下で海藻分類学を学びたいと希望を申し上げたところ，博士がそのことを心から喜ばれ海藻研究の大事なことを説かれた中で山田先生を評して述べられた言葉です。まだそのことの何たるかもよく心得ていなかった私でしたが，宮部博士の“The greatest algologist”という言葉が身震いするほど強烈に響いて，そのときの情景を50年を経た今でもはっきりと思い出します。

1930年に北海道大学に理学部新設の議が決まったとき，宮部金吾博士はその創立委員として新設する植物分類学講座を我が国における藻類研究の中心と位置付け，自ら東京大学に足を運ばれて山田先生を札幌に招博された，ということは私たち分類学教室に学んだ

者には良く知られた話です。また，1933年に理学部付属海藻研究所（現在の海藻研究施設）が山田先生の希望通り室蘭市に設置されたのも，宮部博士からの進言が大きな力になったとのことです。このように，宮部博士の山田先生に対する信頼と期待は私たちには到底計り知れない絶大なものがあったように思われますし，先生もまたそのような宮部博士に対する畏敬の念を常にお忘れにならなかったように思います。

私が分類学教室に在籍していた1950年代頃，昼食時には山田先生はじめ職員，学生の全員が大部屋の机を囲んで弁当を食べながら四方山話に花を咲かせ，賑やかに過ごしたものでした。そこでは堅い学問の話題はほとんどなく，その日の新聞記事を肴にした勝手な評論や，採集旅行での失敗談，あるいは思い掛けない経験談のようなたわいない話が多く，そのために私たちはこれを無責任会議と呼んで昼の一時を楽しんでいました。山田先生もこの昼飯時だけは笑顔で学生たちの仲間入りをされ，時には私たちの勝手な意見にむきになって反論されるなど，なかなか無邪気で一本気なご気性をむき出しにされることもありました。また，お若い頃の留学先であるカリフォルニア大学でのセッチェル先生，パリでのアメル博士夫妻，コペンハーゲンでのローゼンビンゲ教授やベルゲーゼン博士，あるいはストックホルムでのスベデリウス博士などの思い出を時どき話されました。先生にとって留学先でこのような当代随一の世界的海藻分類学者との交流の思い出を語ることは恐らく心楽しいものであったろうと思います。私たちにとってもまた，それまで文献を通じて名前だけは知っていたこれらの学者が，急に身近な存在に感じられたりしたものです。

ところが，このような山田先生が急に威儀を正し，まるで私たちが教授室で恐るおそる先生と向き合って教えを乞う時のように，緊張した面持で言葉を選ぶように小声で話をされることがありました。それは宮部金吾博士のことを話題にされるときでした。

宮部博士が山田先生を厚く信任されたのは，もちろん先生の学識を評されてのことでしょうが，それと共に先生の恩師岡村金太郎博士に対する信頼と友情が根底にあったことも疑う余地はありません。山田先生もまた教えを受けた岡村博士に対する報恩の念と共に，北大における研究や教育に対して陰に陽に厚い庇護を与えられた宮部博士を常に敬慕しておられたように思います。実際に，先生の宮部博士に対する態度は，私達の指導に当たられる時の厳しさや，昼休み時の楽しそうな笑い顔からは全く想像もつかないほどの尊敬の心に満ちたものでした。おそらく，このことは先生と日常的に接した人でなければ気付かないことかもしれません。

山田先生は日常，学生の質問に対して「この群については誰々（著者名）の報告がありますが，それを読みましたか」というように直ちに研究者と文献名を挙げて指導されたものです。それほどに先生ご自身は海藻のあらゆる分類群に注意を払い，該博な知識を持っておられました。コンブについても戦前から折に触れてよく観察研究し，水産上の興味も持っておられたようで，私が水産試験場に勤務するようになってからは思い掛けないご指導を受けたことが何度もありました。一般に良く知られているように，「日本海藻誌」(1936) には我が国のコンブ科植物について，岡村博士の系統的に近い種を大きくまとめる分類の外に，特に宮部博士の種を細分する分類についても紹介されています。山田先生は二人の恩師のどちらの分類法を支持されていたかは定かでありませんが，少なくとも宮部博士の考え方に対しても相当に深い関心を持っておられたように思われます。宮部博士は既に1902年に北海道産コンブ科の分類に関する名著を発表していますが，山田先生が北大理学部に赴任された時，宮郡博士は名誉教授として農学部において千島や樺太（サハリン）のコンブ研究を再開し，つぎつぎと発表されていた時代でした。そのような中で山田先生も新種ウルップワカメや新品種ヒロハヒメコンブを報告したり，ネコアシコンブの耳形体から新葉が発達する様子を明らかにするなどの業績を挙げておられます。なかでも戦後，出版された理学モノグラフ10「コンブ」(1948) という小冊子はわずか77頁ながらコンブの分類学的位置，形態，生態から利用に至るまで，当時の知識を平易に解説した啓蒙書として知識欲旺盛な学生や一般人に広く読まれたものでした。先生はその序文において「著者は昭和五年以来北海道に住ふ様になってからは特に此の類に就いて注意を怠らなかった積もりである」(原文のまま) と述べておられるように，此の本は北大に着任以来18年間にわたるコンブ研究と講義のご経験を総括して書かれたもののように思われます。ご子息で無脊椎動物分類学者の山田真弓先生から頂いた私信にも「父が毎晩帰宅後は遅くまで机に向かって原稿を書いたり，図版の整理をしていたときの意気込みが思い出されます」と述べられています。

先に触れた岡村博士と宮部博士のコンブ科の分類は，平易に言えばアカデミックな分類法と水産などの実業にも則した分類法とでも言うことができます。宮

部博士が北海道のコンブをそれぞれの地方ごとに細かく分類したのは，自ら道内の沿岸各地を何度も旅してコンブを実地に観察採集し，また多くの協力者により標本を集めて，各地方のコンブのわずかな特徴の違いにまで精通していたためですが，そのような植物学上の分類が昆布製品の銘柄区分や味，品質と言った食品としての微妙な違いにも見事にマッチし，現在でも水産業や利用加工業から合理性が認められていることは注目すべきことでしょう。

それはともかく，岡村博士のアカデミックな海藻分類学の継承者である山田先生が，このような宮部博士のコンブ分類法にも深い関心を持っておられたということはちょっと不思議な感じもしますが，しかし私にはなるほどと納得できる点があります。北海道の沿岸は砂浜地帯以外はどこでも豊富にコンブが生育して，観察や採集には事欠きません。山田先生は北海道に住まわれてからコンブに目をむけ，地方に採集にでかけるとその土地のコンブを観察し，また漁業者から生育状況や昆布漁業の実情を聞き取られたようで，私がコンブ研究を始めた当時は先生からよくご自身の経験談を聞かされたものです。なかでも，日本海のホソメコンブともリシリコンブとも判断しかねる標本をお目にかけると大変興味を示され，「あそこのコンブは再生するものがあると聞いているので是非それを探しなさい」などと具体的な地名をあげて教示されました。また，後年知床の海藻採集に同行したとき「この地方のオニコンブは道南のマコンブと同じと思っていたが，実際に現地でたくさんのコンブを見るとやっぱり違うね」と納得されたように話されたことがあります。山田先生も宮部博士と同じように北海道各地のコンブを数多く観察されているうちにその分類法に次第に興味を持ち，納得されるようになったのではないかと思います。

宮部金吾博士が "The greatest algologist" という最高の賛辞をもって山田幸男先生を呼ばれた日からわずか半年後の1951年3月16日，博士は満91才の生涯を閉じました。この時の山田先生のご心境は如何ばかりであったでしょうか。山田先生が宮部博士の藻類，特にコンブ研究について述べられた追悼の辞の最後の一文を掲げて先生が慈父とも慕う亡き師に捧げる真心を偲び，ご生誕百年を記念する拙文と致します。

「宮部先生は自ら主として我国コンブ類の研究を行われ，(中略) 特に我国海藻学の黎明期に当ってその基礎をきずかれた岡村金太郎先生の先達となり，またその後もたえず我国海藻学の発達に尽力されたことはその後を歩む吾々としては誠に感謝に堪えないところである。先生なき今一入その感を深くすると共に，この御高恩に報ゆるため一層の努力を致すべきを深く自ら心に期する次第である。」(「宮部金吾」1953)。

(041-0841 函館市日吉町 4-29-15)

吉田　忠生：山田幸男先生と海藻研究

1921年（大正10年）に東京大学に入学された山田幸男先生は植物分類学を志し，海藻学者を養成したいという早田文蔵先生のご意向に従って，海藻学を専攻することになったという。勉強は江ノ島や上総大原などへ定期的に採集にいって標本を観察し，当時水産講習所におられた岡村金太郎先生の指導を受けることによって始められた。ちょうどこの頃，北海道大学の教授であった故遠藤吉三郎氏の蔵書と多量の標本が東京大学に寄贈され，これらを利用することで大いに勉強が捗ったことであろう。1924年には早田先生の指示によって台湾に旅行して，各地で熱帯性の海藻を集め，さらに1925年にはミクロネシアに赴いて海藻採集をされた。これらの結果に基づいて，The phyto-geographical relation between the Chlorophyceae of the Mariannes, Carolines and Marshall Islands and those of the Malay Archipelago, Australia and Japan という表題で，東京で開催された第3回汎太平洋学術会議で発表された。このころ先生は近衛兵として兵役に就いておられたため，軍服姿で講演されたとのことであり，衆目を集めたことであろう。会議の間には Berkeley の Setchell 教授とも会う機会があり，それが縁となって1928年（昭和3年）から2年間の在外研究の場所として Setchell 教